

市毛雅大「横田基地による PFAS 汚染どこまで明らかになったか」（発言原稿）

皆さん、こんにちは。多摩 PFAS 連絡会世話人及び事務局をしています市毛雅大です。横田基地のある福生市の市議会議員でもあります。本日は「横田基地による PFAS 汚染どこまで明らかになったか」と題して、一番目のパネリストとして多摩地域の PFAS 汚染について多摩 PFAS 連絡会の前身である多摩地域の PFAS 汚染を明らかにする会がどのように活動してきたのか、何を明らかにしてきたのかについて報告したいと思います。発言の正確性を期すために原稿を用意してきました。それを読むためなかなか前を向けませんが、どうぞよろしくお願いします。

さて、基本的な話から入りますけれども、PCB、アスベスト、フロンガスなど、はじめは便利な化学物質としてさまざまに社会の中で利用されてきましたが、その後、人体や環境に有害なことがわかり、規制される物質があることは皆さんご存知と思います。水俣病やイタイイタイ病のようにそれらの化学物質が規制されるまでには多くの人の命と健康が犠牲となってきました。有機フッ素化合物 PFAS は今やっとそれらの物質と同じように危険性が周知されてきたのではないかと思います。私が初めて市議会に取り上げたのが 2019 年の 12 月議会でした。あれから五年、私も立ち上げに加わった多摩地域の PFAS 汚染を明らかにする会およびそれにかかわる多くの市民の皆さんとの活動でたくさんのことを明らかにしてきました。なかでも、大きな意義があったのが 800 名弱の多摩住民の自主的な PFAS 血中濃度調査、また百箇所以上の地下水調査であったとふりかえります。

はじめに、その血中濃度調査について報告します、本日配布資料の 52 ページをご覧ください。この表は PFOS・PFOA・PFHxS とそれぞれ分かれています。米国アカデミーでの「健康被害の恐れがある」とされる人はこの 3 つ PFAS のほかさらに四つの PFAS を足した合計値が、血液 1ml 当たり 20 ナノグラム以上の血中濃度の方と定義されています。私たちが行った血液検査の結果をその定義に則って、自治体別のその値を超えた方の割合を上位 10 自治体紹介します。これを最初発表した 2 年前だいぶニュースになりましたので知っている方も多いと思いますが、大事なことなので改めて紹介します。1 位が国分寺市、米国の指針値を超えた割合はなんと 93%、2、立川市 74%、3、武蔵野市 70%、4、国立市 63%、5、府中市 57%、6、小平市 55%、7、あきる野市 53%、8、調布市 52%、9、小金井市 45%、10、西東京市 44%です。血液検査をした全 789 名のうち 46.3%のかたが指針値を超えていました。つまり、ここにいる方の半分弱が、健康被害の恐れがすでにあるのです。また、今紹介した上位 10 自治体は、あきる野市以外すべて横田基地から東側にある自治体であることがわか

りました。

この血液検査の結果を発表するために記者会見を行い、その際に検査へご協力いただいた2名の方が発言しているのですが、本日改めてそれを紹介したいとおもいます。1人目の方。国分寺市内ばかり5か所転居した。今、東恋ヶ窪浄水所の近くに住んでいる、お鷹の道の水はおいしいと有名なので、その水をくみ、飲むこともあった。私はこれまで、脂質異常との診断だが、医師から原因は不明と言われている。もしかしたらPFASが原因なのか。娘も脂質異常がある。これからの命のためにも分析を続けてほしい。健康被害とその原因の追及をしたいと発言されていました。

2人目の方は、同じく東恋ヶ窪に住んで45年、水道水を飲んできた。体のほうは、腎臓が悪く、脂質異常もある。今回の結果は衝撃的結果。とても驚いて、泣いてしまった。身に覚えのない毒に侵されてしまった。公害を受けた人たちの心境が分かったような気がする。広範な地域での検査、モニタリングが必要だ。この汚染は誰の責任か、どこからやってきたのかと言いたいと率直な感想を述べてくださいました。

多摩地域には約429万人もの人が住んでいます。そのまま当てはめるのは少し雑ですが、429万人の4割は171万人です。少なく見積もり3割で計算したとしても128万人です。128万人もの人がこの多摩地域で健康被害の恐れがあるというのは、あまりに衝撃的な結果です。水俣病の認定申請者数が2万2千人ということを踏まえると、これは過去の四大公害を超える被害なのではないかと思います。しかし、だからこそ当時の明らかにする会では、血液検査だけをして終わらせることはできませんでした。いったいこの汚染はどこからくるのか、当然それを考えることになります。そこで私たちは次に自主的に地下水汚染調査を行ないました。地下水、井戸水、湧き水などの提供を市民にお願いし、多摩地域で検体を採取、これらのPFAS濃度測定を当時の肩書ですが、京都大学医学研究所、原田浩二准教授へ依頼しました。広く検体提供を呼びかけ、最終的には、地下水、井戸、湧水、表層水、河川、水路、池水、そこ土、土壌、157か所の提供があり、うち地下水140、表層水10について分析を行いました。

これについての原田先生の分析と考察を紹介します。全体について、調査対象のほぼ全てからPFASを検出した。浅井戸97か所のうち19か所、約20%、深井戸の35か所のうち17か所、49%で50ng/Lを超えた。北多摩地区の広範囲の地下水が環境省の暫定指針値を超えた。立川市西部でのPFAS濃度が最も高かった。

立川市及び国分寺市について、在日米軍横田基地南東側、立川市の浅井戸で最高濃度のPFOSが検出された。国分寺市、府中市などでは、深井戸でPFOS、PFHxSが高い傾向が見られた。立川市西部の浅い領域からの影響が大きいと考えられた。浅井戸での中心点より深井戸では中心がさらに東側にあり、地下水の流れに乗って西側から移動してきていることが推測された。深井戸で浸透が早いPFHxSは、PFOSよりも東側で割合が増えていた。結果、国分寺市でPFHxS濃度が高くなったと示唆さ

れる。

代替泡消火剤——代替というのは代わりのものですね、代替と書くほうです——代替泡消火剤のP F A S成分6 2 F T Sも検出、地下水への浸透経路が共通していることを示唆、表層水では、残堀川が立川市に入るとP F O S濃度が上昇し、暫定指針値を超えた。原田先生の分析と考察は以上です。そしてその結果から、私たちの会は以下の4つの声明を発表しました。

1、汚染の被害は現在も拡大している。横田基地の東側から高濃度の汚染が広がっています。最高値はP F O S、P F O Aの合計値で3 1 0 1 n g / L、横田基地周辺の土壌が汚染され、土壌に浸透していく過程で地下水を汚染し、井戸所有者及び周辺住民が汚染を知らないまま飲用水、業務用飲用水、営農用水として利用を継続していた実態がありました。これらの汚染を補償する行政支援がない今の状況で、汚染の被害を受けた地域住民からは、井戸の町名公表を控えてほしいという戸惑い、不安の声が多く出ています。

原田先生の分析でも、土壌浸透で動きの早いP F H x Sの中心が時間の経過とともに国分寺市側に移動していることが示唆され、この問題が長期間手つかずのまま放置されてきたことで、地下での汚染が発生源から東に向けて移動していることが改めて確認できました。

そして、この問題は多摩地域だけではなく、区部にも拡大していることが、今回、調査の一部検体及び東京都水道局の公表資料からも分かっています。

2、横田基地が最大の汚染源であることは明確である。横田基地が汚染源と認める、認めないを問わず、横田基地からの地下水の流れに沿った汚染調査が急務です。あわせて、被害救済も含む自治体による対策を早急に行う必要があります。横田基地および、横田基地以外の汚染源の特定のためにも、大規模な調査が必要です。

3、表層水での汚染実態と今後の課題について。河川表層水での測定結果では、検体のほぼ全てからP F O S、P F O Aを検出し、特に残堀川の2地点では、暫定指針値を超えていることが判明しました。多摩地域には、残堀川以外にも空堀川、野川、そして多摩川から東村山浄水場へ原水を運ぶ玉川上水路があり、これらの表層水の汚染も無視できません。

4、多摩地域住民、特に水源井戸の取水停止のあった8つの自治体住民は、国の暫定目標値が設定される2 0 2 0年以前に、長期間にわたり、P F A S汚染された地下水を水道水として摂取してきた過去の蓄積に加え、今、なお、水道水以外からの暴露が懸念される実態が、今回、見えてきました。P F A S汚染された井戸水を知らずに飲用してきた方々からは、血液検査の希望が多数出されています。特に、都内の子供たちの体内汚染の実態は全く把握されておらず、多摩地域在住で血液検査を希望する子供たちへの暴露調査は、緊急の課題です。

これまでの血液検査結果と、この多摩地域 P F A S 水質調査から、多摩地域は、P F A S 汚染のホットスポットであることは明らかなです。これ以上の暴露被害拡大を食い止めるためにも、まずは、東京都と国は、速やかに多摩地域住民に対する体内汚染の実態調査を行う必要があると、私たちは考えます。声明は以上です。

これについての結果をまとめたものが資料集の 52 頁の上の部分に等高線図としてのっています。私たちの調査の半年ほど前には、東京新聞さんが調査報道を行ない、その結果も資料集の 48 頁から 51 ページにまとめられています。ここで皆さんにあらためて見ていただきたいのは、資料集 49 頁の地図及び 52 頁の地図です。先ほども言った通り、この東京の多摩地域は、多摩川の流れや玉川上水のありようからわかるように、奥多摩からほうから標高が高く、東に行くにつれ段々と低くなる西高東低の地形になっています。もちろん地下水もおよそそのようになっていることが明らかなわけですが、いかがでしょうか。地下水の流れ的に上流は PFAS 濃度が低く、横田基地を境に PFAS が大きく検出されていることがわかります。

これまで横田基地で明らかになっている PFAS 漏出事故は 2010 年から公式に認められたものは全部で 9 件です。次は資料集の 30 ページをご覧ください。わかりやすい一覧表があるので参考にしてください。漏出事故はどれもアウトなのですが、この 9 件の中でも私は特に 2012 年の消防署タンクから泡消火剤原液 3000L 漏出という事案があるのですが、これが特に事象としては重大ではないかと考えています。基本的に泡消火剤はこの原液と水を混ぜて使用するのですが、防衛省が 2023 年 10 月 6 日に発表した「泡消火剤等の処理完了予定時期等について」という資料の中で、全国の自衛隊基地において、過去に泡消火薬剤を使用していた水槽の水、その調査をしているのですが、その水がおそらく泡消火薬剤と混ざった水だと思われるのですが、1L 当たりの濃度が百万 ng/L を超えるような超高濃度の汚染水があることが分っています。混ざった水が百万 ng/L 超えですから、水を混ぜる前の原液の濃度は文字どおりケタ違いであろうと推察されます。そしてそれが 3000L も漏出したということですから、その深刻さは想像を絶する問題だと指摘しなければなりません。

また、今報告したのは滑走路西側の消防署の近くのタンクの話ですが、それとは別に、滑走路東側に泡消火剤を使つての消火訓練を 1970 年代から 2010 年代まで 40 年間も日常的にやっていた消火訓練施設もあります。消防署タンク周辺とはまた違う場所のこの消火訓練場も充分汚染されているものと考えられます。実際、NHK の取材では消火訓練場近くのフェンス外の畑の土は 1kg 当たり 13 万ナノグラムという高濃度の数値が出ています。資料集第二部の 21 ページに載っています。

ここまでの状況証拠があつて、どうして横田基地でないと言う事が言えるのでしょうか。この話のテーマは「横田基地による PFAS 汚染どこまで明らかになったか」という主題ですけれども、結論としては間違いなく横田基地ですと正面から言い切ること

ができます。むしろ、どうやってこれだけの証拠がある中で否定できるのか、なぜ責任を取れないのか、きっと次の富永先生の専門分野の日米地位協定の話などからその謎を解いてくれると思います。私からは以上となります。ご清聴ありがとうございました。